



## 郵

送している皆さまにはすでにお知らせしているのだが、学習塾を始めることになった。元々考えていたことではさらさらなく、あれこれ動き始めている今になってもどこか狐につままれていような感じが抜けない。

去年の秋口に川上教諭が我が家を訪ねてきた。彼とは高尾小学校で一年ともに過ごした。わずか一年だったが、その間に「にこにこ寄席」はぼくのクラスの取り組みから全校児童のものになり、その年の終わりの卒業公演は、ちよつと忘れたい傑作になった。へき地教育、複式教育に精通した目には、にこにこ寄席がぼくとはまた少し違ったものに見えたらしい。彼の再定義と新たな価値付け、さらには精力的な実践がなければ、十年経つての全国表彰はあり得なかった。

川上さんが言うには、定年後に算数塾を開くことにしたので手伝ってほしい、ということだった。算数の専門家で附属小の教員や県の指導主事を長く勤めた人だから、その能力を活かすにはびつたりだ。だがぼくはとても適任とは言えない。ぼくの顔に浮かんだマークを読み取って、「いや、落語教室を担当してください。」と言葉を加えた。マークが増える。

詳しく話を聞いてみると、起業に向けた学習会で、講師から「使えるものは何でも使え」とアドバイスを

受けた。高尾小で落語をしていた話したら、それを使わぬ手はない、と強く勧められたのだと言う。算数と落語、イメージとしては対極だが、だからこそひついたらおもしろい。それで先の依頼になった。

塾長川上さんは、ぼくが断るかもしれないとは一切思わなかったらしく、できあがった事業計画書にはしつかり組み込まれていて、読んでみるとつくに承諾していた気分になった。老後資金をつぎ込むわけでもないのに断る理由もなく、落語をやってみたいという奇特な子どもが一人でも現れたら、何だかおもしろいことになりそうなので、引き受けることにした。誘いには乗ってみる、というのを定年後の心がけの一つにしているが、まさかこんな誘いがあるとは思わなかった。

今は、七月の開校に向かつて塾長は忙しくしている。ぼくはと言えば、頼まれた仕事をちよつぱりする程度で楽しせてもらっている。その仕事の一つが、ホームページづくりで、ついこの間開設した。  
<https://katsuzyuku.jimdofree.com>

ネット環境のある方、ちと面倒ですが右のURLを入力すればご覧いただける。せつかくなので塾に関係あるなし関わらず、読んでおもしろいものにしたと思う。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

空き家 8

## 木幡智恵美

蘇る家⑤

娘が独身だった頃、たまに昼食を一緒にと誘ってくれ、いろいろなお店に連れて行ってもらった。その中の一つに、古民家を改装したカフェがある。

山間にあるカフェで、駐車場からの砂利道を、残る雪で滑らないように気を付けながら店を目指した。保育所から高校まで一緒、大学時代に離れていたものの、松江に帰ってからまた頻繁に会っているNさんとお母さん、総勢四人で訪れた。築百五十年の家を改装したという太い柱が支える建物だ。一階の広いスペースの真ん中でえんと薪ストーブが置かれていた。もう十年以上も前のことで、何を食べたのかなどすっかり忘れてしまったけれど、木に包まれた落ち着いた空間に、薪を焚きつけたストーブから醸し出される暖かな空気は、今も肌の奥に沁み込んだままである。

もう大きいバイクには乗る自信がなくなり、今はスーパークブで走るだけだ。ど、退職したての頃は、二年続けて北海道まで中型バイクに乗って夫とツーリングした。三年目は九州、阿蘇周辺から高千穂まで走った。一年目に出会ったライダーに、ライダーハウスなるものの存在を知らされ、二年目と三年目は専らそこを利用する。値段が格安で、中には一泊千円で朝食付きなんてところもあったし、部屋に入りきれなければ廊下で雑魚寝という七百円の宿もあった。九州で泊まったところは、外見は倉庫のような建物なのに、中に入るとレストラン。奥には宿泊できる小部屋があった。ご主人は世界中を渡り歩いた料理人ということで、中でもビーフストロガノフは絶品だった。

当時囁託として働いていた事務所の同僚たちとそんな話をしていたら、「実家をライダーハウスにしたら」と言われた。全国各地からいろいろな人が訪れて、それぞれが体験した話を聞きながら過ごすのもいいかと思つて夫に話すと、「近所迷惑だわ。バイクの音がうるさいし」と蹴された。

私の生家、築百五十年はいかないだろうが、百年は優に越えている。五十年前に改装し、その十数年後に空き家になった。人が住まなくなると、だんだん住めない家になつていく。

30代フリーター 誰のため、何のためなら、お前は死ぬるか、と問われたら、ジイさんどう答える？ 今のウクライナ国民なら、多くが「国のため」と答えるだろうし、日本ではそれは少数派だろう。

年金生活者 戦後80年近くにわたって戦争をしたことのない国では当然のことだろう。だが、「わが子のため」だったら多いはずだ。前者は実感の後押しがないのに対し、後者はそれがあ

国のような公の存在は目に見えない。死を覚悟するには理屈だけでなく、感情の起動が必要だ。目に見えない対象はその感情を喚起しにくい。国家は戦争という目に見える形をとったとき、そのために死ぬ覚悟を誘うことができる。

「わが子」はそれと違って目に見える生身の存在だ。それが「この子を守るためなら死んでもいい」という感情を喚起する。同じことは程度の差はあれ夫婦や恋人、きょうだいなどの関係でも、その機会はほとんどない。

自分自身を守るために自らの命を絶つのは矛盾を含んでいるが、生きることに耐えられなくなるほど追い詰められた自分を、耐えがたい生から守るため、という考えは成り立つ。この死は今なお多い。

3通りの犠牲死を、吉本隆明の考えにしたがって分類すれば、国家など公の存在を守るための死は共同幻想の領域に、親密な相手を守るための死は対幻想の領域に、そして自分自身を守るための死は個人幻想の領域に位置づけられる。それらの多寡をくらべると、私たちの社会ではいま個人が切実な問題としてせり上がってきていることを感じないわけにはいかない。

30代 公のため、家族のため、というのはわかるが、自殺が自分を守るため、というのは実感からかけ離れてい

にも言える。ただ、親子の場合は「死んでもいい」という感情がとりわけ強いことが、実感から言える。

30代 なぜなんだ。

年金 『死はなぜ進化したか』（ウィリアム・R・クラーク著、岡田益吉訳）という本の知見を借りて、生物学的な理由づけをしてみる。この著者によると、生物は有性生殖を始めたときから、老化によって死ぬようになった。細胞分裂で増殖する単細胞生物には老化がなく、死ぬのは高熱や衝撃で細胞が破壊されたときだけだ。

有性生殖をする生物はなぜ死を運命づけられているのか。セックスをする生物は多細胞生物だ。その細胞にはふた通りあって、ひとつは身体を構成する体細胞であり、もうひとつは生殖細胞だ。このうち体細胞は分裂を繰り返すうちに突然変異が蓄積されて、危険な細胞となる。

これに対し、生殖細胞は、異なるDNAが混じり合あうので、組み換えが起こり、危険な体細胞が次世代に伝わ

る。

年金 誰かのため、何かのために死を覚悟するのは、自らを犠牲にすることによってそれらを生かすのが目的だ。自殺が自らを犠牲にすることによって自分自身を生かそうとすることだとすれば、それは死後に生まれ変わることをどこかで信じていることを意味する。

歌舞伎俳優の市川猿之助とその両親が自宅で倒れているところを発見され、両親が死亡した事件で、猿之助は

るのが阻止される。そして、危険な体細胞をいつまでも残しておくのは種の危機につながるから、老化によって死ぬようにプログラムされている。

生物学的には、親は子を生かすために、死ななければならぬ。わが子のためなら死んでもかまわないという感情の強さの背後にそれがあると考えられる。

30代 誰かのため、何かのため、と言っても、その対象によって死の性格は違ってくる。

年金 守る対象は3通りに分けられる。ひとつは国家など公の存在であり、もうひとつは家族など近い誰かだ。そして3つ目は自分自身であり、これは自殺を指す。

国を守るための戦争での死は、戦後の日本では皆無となった。親密な誰かを守るための死は、親が水に溺れるわが子を助けようとして命を失うニュースなどが伝えられることがまれにあり、皆無ではない。社会全体が貧しかった時代には、わが子を飢えや寒さ

「死んで生まれ変わろうと家族で話し合い、両親が睡眠薬を飲んだ」という趣旨の話を警察にしていたことがわかった、と報じられている（5月20日日テレNEWS）。

人が何かのため、誰かのために死のうと考えることができるのは、人間にとつて死が生の個別性を離れて普遍性に向かうことだからだ。普遍的な存在になることは、他なる存在になることを意味する。自殺の場合は、なるべく他なる存在が自分自身ということになる。

30代 人間は寿命が尽きるまで生かさねなければならぬというのが倫理の基本だとすれば、ひとりの生命が、もうひとりの生命や公の存在を守るために犠牲になるのはそれに反する。

年金 今世紀の初め、吉本隆明はそれを「人間の存在の倫理」と呼んで戦争やテロを批判した。理想社会を考えるとき、すべての犠牲死が不必要になることがその成立条件のひとつとなる。

ニュース日記 878  
中村 礼治

## 誰かのため、何かのために死ぬとは